

アメリカ東海岸の大学図書館

加 藤 恭 輔

1990年7月19日から8月16日までの30日間、私はアメリカ東海岸の主要な都市、ボストン、ニューヨーク、ワシントン D. C.、そしてシカゴへ中京大学英文学科の語学研修の学生と共に自分自身の語学研修図書館視察見学を兼ね同行引率旅行に出掛け、その合間を縫って、それぞれの都市の大学図書館及び公共図書館を見てきました。ここでは、私が訪問して来た大学図書館を五つ、その環境、建物、歴史、社会との拘わりなど、感じたまま報告します。

日程は、次のようでした（語学研修の学生とは若干異なる）

7月19日	}	ボストン
7月30日	}	ニューヨーク
8月6日	}	ボストン
8月9日	}	ワシントン D. C.
8月11日	}	カンカキー（ホームステイ）
8月13日	}	シカゴ
8月16日		

今回、訪問した図書館のうち、ここで報告する五つの大学図書館は、ボストンのマサチューセッツ工科大学図書館、ハーバード大学図書館、マサチューセッツ州立大学図書館、ニューヘブンのイェール大学図書館、ニューヨークのコロンビア大学図書館です。日本の大学図書館とは今一つ違った感じを

受けるアメリカの大学図書館、それが、一体どんなものなのか、現地の様子も含め肌で感じて来たことを報告します。

ボストン (Boston, Massachusetts)

ボストンの中心地から地下鉄で約20分ラザボアーという駅で降り、車でおよそ15分、とても美しい町、そして緑の樹木に囲まれた小高い丘のうえに私達の宿泊したドミトリーはありました。そこを中心に私達の、ボストンでの20日間の生活が始まりました。

ボストンの地下鉄は、なかなかのもので、4路線あり、それぞれブルーライン、オレンジライン、レッドライン、グリーンラインと呼ばれ、車両にもそのラインに合わせた色が入っていてどこに行くにも分かり易くとても便利でした。よくアメリカの地下鉄は汚い怖いと日本では聞いてきましたが、車両も車内もとても奇麗で怖いことにも会いませんでした。ただ危険な地域のこととは聞いていたのでそういった所には行きませんでした。

ボストンは、大西洋に面していて一つの大きな川で新しい街のダウントウンと昔からの学問の街（ケンブリッジ）に分かれているような感じがしまし

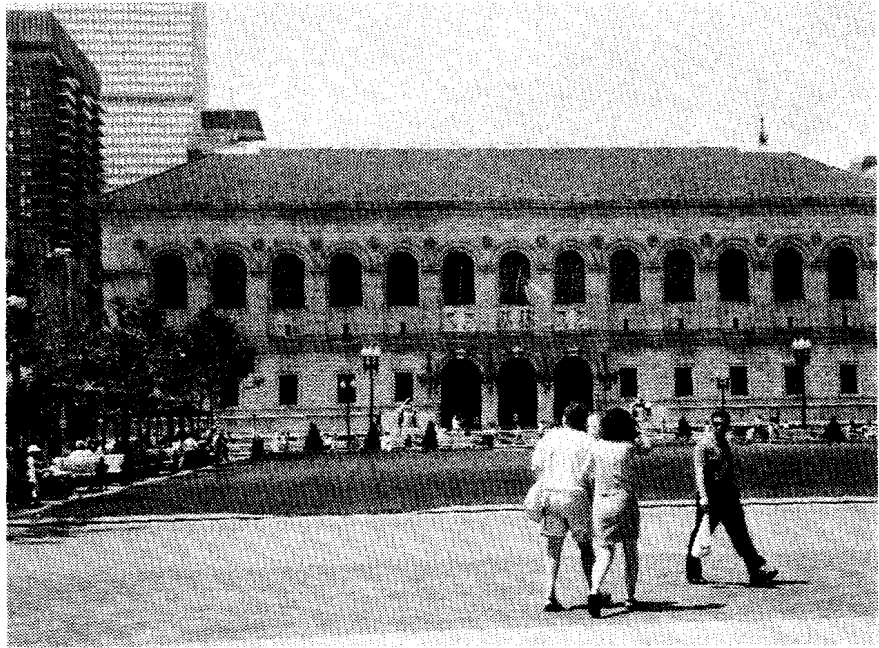
た。

ダウントウンは、話に聞くと昔は高い山だったそうです。あまりにも物語り過ぎる話ですが、昔、その山を人々が少しずつ削り取って今のダウントウンの原型を作ったということだそうです。その



1. ボストン地下鉄ラザボアー駅とグリーンラインの車両

証拠にダウンタウンの中には、有名なビーコン・ヒルと言う地名があり、また通りの中のマウント・バーノン通り、と言ったように、地名の中にその歴史的事実を残しているのだと、現地のアメリカ人



2. ボストン公共図書館

(この人は、大学

の先生)が話してくれました。ダウンタウンは北からノース・エンド、ビーコン・ヒル、チャイナタウン、サウス・エンドといった地区に分かれていて、その中央に位置するボストン・コモンは、アメリカで最も古い公園として有名です。もともとは、牛の放牧場だったらしく、その後集会や講演などが行われるようになり、市民の共有の場となりコモンの名がついたと言われていきます。

ボストンを分断するかのようになっているチャールズ川を隔てて良く耳にする、チャールズタウンとケンブリッジがあります。

チャールズタウンには、独立戦争初期(1775年頃)、この丘(正確には、ブリーズ・ヒル)のうえで行われたバンカー・ヒルの戦いを記念して立てられたバンカー・ヒル記念塔が、それとその眼下の海軍ドックの中には1812年のイギリス艦隊との戦いを含め40戦全勝を誇るアメリカ海軍史上最も有名な軍艦、コンスティテューション号が停泊してありました。

ケンブリッジには、ボストンのサウス・エンドからハーバード橋(Harvard Bridge)でチャールズ川を渡って、すぐにマサチューセッツ工科大学があり、またハーバード橋を真っすぐ行くとハーバード大学があります。



3. ボストン美術館

そのほかにもボ
ストンには、ボス
トン美術館を代表
に多くの美術館や、
アメリカ最初の公
立学校跡などがあ
り、又1630年清教
徒がイギリスから
逃れ、この新大陸
に自由を求めて移
り住んでからの数
々の出来事、例え

ばイギリスの植民地であったがために、またそれを弾圧しようとしたがために起こってしまったボストン虐殺事件（1770年）とボストン茶会事件（1773年）、そして植民地関係は悪化の一途をたどり、ついには独立戦争（1775年～1783年）へと移って行った歴史が残されていてアメリカの歴史そのものを直に知ることができ、とても素晴らしい所でした。

それでは、ボストンで訪問した図書館を報告します。

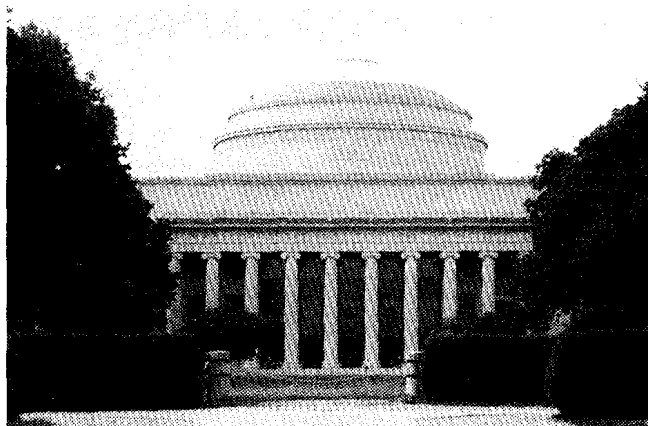
マサチューセッツ工科大学図書館

(Massachusetts Institute of Technology Libraries)

7月23日、月曜日、晴れ、午後1時、MITの図書館にいきました。ドミトリーから地下鉄ラザボアー駅まで車で行き、ラザボアー（グリーンライン）からマサチューセッツ工科大学のあるケンダール駅（レッドライン）までパークストリート駅で乗り換えて約30分、チャールズ川を渡り、ケンブリッジまで行きます。地下鉄を降りて西の方角に5分ほど歩くと、そこがマサチューセッツ工科大学です。構内にはいると、いかにも工科大学らしく、近代的なビルが幾つも建っていて長い歴史を持っている大学のイメージではありま

せんでした。図書館はキャンパスの南のほぼ中央に位置し、有名なグレイトドームの東側にありました。

MIT の図書館には、五つの大きな図書館があり、工学 (Engineering)、科学 (Science)、社会科学と経営管理 (Social Sci-



4. グレイトドーム

ence and Management)、建築学と設計計画 (Architecture and Planning)、人文科学 (Humanities) のカテゴリーに分けられていて、さらに六つの小図書館、音楽 (Music)、衛生科学 (Health Sciences)、航空学と宇宙航行学 (Aeronautics and Astronautics)、大地 (Earth)、大気科学と地球あるいは惑星科学 (Atmospheric and Planetary Sciences)、産業関係 (Industrial Relations) に分けられ、さらに特殊コレクションとしての図書館と視覚コレクション (Visual Collections) があります。今回アポを取って訪問した図書館は、このうちの人文科学図書館です。対応をしてくれた女性図書館員は、私のように各地から MIT 図書館を見学に来る人、特に図書館の業務に従事している人に対して案内をする専門のレファレンサーで、かなり細かく図書館の中を案内してくれました。そのレファレンサーの女性図書館員はこれら全ての図書館を見て歩くのは一日ではとても無理と言い、それぞれの図書館の説明をしてくれましたが、所蔵する図書の種類の特殊性と量の違い、雑誌のタイトル数の極端な違い(工学図書館にはかなりのタイトルの雑誌があるようで)、開館時間の違いなどで、貸し出しなどのシステムに関しては殆んど変わりがないとのことでした。

ところで、創設1861年、総合大学では、世界最高峰の MIT 図書館の総所蔵冊数は、図書が約210万冊、約160万のマイクロ、写真、地図、視聴覚資料、コンピューターソフトがあり、約21000の逐次刊行物があるとのことでした。現在では、年間約4万冊の図書、6万のマイクロ等の増加があり、毎年約21000にも及ぶ逐次刊行物をカレントで受け入れているとのことでした。

開館時間は、春秋時間と夏時間があり、次の表のようになっています。

表 3 A

MIT LIBRARIES FALL AND SPRING TERM HOURS September 11 - December 22, 1989 and February 5 - May 24, 1990			
<u>Administrative Offices</u>	14S-216	<u>Microreproduction Lab</u>	14-0551
Mon-Fri 9-5	253-5651	Mon-Fri 9-5	253-5650
Sat-Sun closed		Sat-Sun closed	
<u>Aeronautics and Astronautics Library</u>	33-316 253-5666	<u>Music Library</u>	14E-109 253-5689
Mon-Fri 8:30-6		Mon-Thu 8:30-11	
Sat 11-6		Fri 8:30-7	
Sun 1-5		Sat 11-6	
		Sun 1-11	
<u>Barker Engineering Library</u>	10-500 253-5661	<u>Reserve Book Room</u>	14N-132 253-5675
Mon-Thu 8:30-11		Mon-Thu 8:30-11	
Fri 8:30-7		Fri 8:30-7	
Sat 11-6		Sat 11-6	
Sun 1-11		Sun 1-11	
<u>Computerized Literature Search Service</u>	14S-M48 253-7746	<u>RetroSpective Collection</u>	N57 253-7040
Mon-Fri 9-5		Mon-Fri 9-5	
Sat-Sun closed		Sat-Sun closed	
<u>Dewey Library</u>	E53-100 253-5677	<u>+Rotch Library</u>	7-238 258-5590
Mon-Thu 8:30-11		Mon-Thu 8:30-10	
Fri 8:30-7		Fri 8:30-7	
Sat 11-6		Sat 11-6	
Sun 1-11		Sun 2-10	
<u>*Humanities Library</u>	14S-200 253-5681	<u>Rotch Visual Collections</u>	7-304 253-7098
Mon-Thu 8-12		Mon-Fri 8:30-6	
Fri-Sat 8-8		Sat-Sun closed	
Sun noon-12		<u>Schering-Plough Library</u>	E25-131 253-6575
<u>Institute Archives and Special Collections</u>	14N-118 253-5688	Mon-Fri 9-6	
Mon-Fri 9-5		Sat-Sun closed	
Sat-Sun closed		<u>*Science Library</u>	14S-100 253-5685
<u>Lindgren Library</u>	54-200 253-5679	Mon-Thu 8-12	
Mon-Fri 8:30-11		Fri-Sat 8-8	
Fri 8:30-7		Sun noon-12	
Sat 11-6			
Sun 1-11			

* Open 24 hours a day for members of the MIT community only. (MIT ID required).
+ Construction may cause unexpected closing. Call ahead for hours of the day.

SPECIAL SCHEDULES ARE POSTED FOR HOLIDAYS

表 3 B

MIT LIBRARIES SUMMER HOURS
May 25 through September 9, 1990

<u>Administrative Offices</u>	14S-216	<u>Microreproduction Lab</u>	14-0551
Mon-Fri 9-5	253-5651	Mon-Fri 9-5	253-5650
Sat-Sun closed		Sat-Sun closed	
<u>Aeronautics and Astronautics Library</u>	33-316 253-5665	<u>Music Library</u>	14E-109 253-5689
Mon-Fri 9-5		Mon-Tue 9-6	
Sat-Sun closed		Wed 9-8	
		Thu 9-6	
		Fri 9-5	
		Sat-Sun closed	
<u>Barker Engineering Library</u>	10-500 253-5661	<u>Reserve Book Room</u>	14N-132 253-5675
Mon-Thu 9-8		Mon-Fri 12-5	
Fri 9-6		Sat-Sun closed	
Sat 11-6			
Sun 1-8		<u>RetroSpective Collection</u>	N57 253-7040
<u>Computerized Literature Search Service</u>	14S-M48 253-7746	Mon-Fri 9-5	
Mon-Fri 9-5		Sat-Sun closed	
Sat-Sun closed		<u>+Rotch Library</u>	7-238 258-5590
<u>Dewey Library</u>	E53-100 253-5677	Mon-Tue 9-6	
Mon-Thu 9-8		Wed 9-8	
Fri 9-6		Thu-Fri 9-6	
Sat 11-6		Sat-Sun closed	
Sun 1-8		<u>Rotch Visual Collections</u>	7-304 253-7098
<u>*Humanities Library</u>	14S-200 253-5681	Mon-Fri 9-5	
Mon-Thu 8-12		Sat-Sun closed	
Fri-Sat 8-8		<u>Schering-Plough Library</u>	E25-131 253-6575
Sun noon-12		Mon-Fri 9-5	
<u>Institute Archives and Special Collections</u>	14N-118 253-5688	Sat-Sun closed	
Mon-Fri 9-5		<u>*Science Library</u>	14S-100 253-5685
Sat-Sun closed		Mon-Thu 8-12	
<u>Lindgren Library</u>	54-200 253-5679	Fri-Sat 8-8	
Mon-Fri 9-5		Sun noon-12	
Sat-Sun closed			

* Open 24 hours a day for members of MIT community only (MIT ID required).

+ Construction may cause unexpected closing. Call ahead for the hours of the day.

Memorial Day Weekend

Humanities and Science Libraries close Sunday, May 27 at 8:00 pm;

reopen Tuesday, May 29 at 8:00 am.

All other libraries closed Saturday, May 26 - Monday, May 28.

Independence Day

Humanities and Science Libraries close Tuesday, July 3 at 8:00 pm;

reopen Thursday, July 5 at 8:00 am.

All other libraries closed Wednesday, July 4.

Labor Day Weekend

Humanities and Science Libraries close Sunday, Sept. 2 at 8:00 pm;

reopen Tuesday, Sept. 4 at 8:00 am.

All other libraries closed Sunday and Monday, Sept. 2 and 3.

貸し出し件数もここ数年50万件を越えており昨年（1988~89）の件数は、55万件を上回ったとのことでした。ちなみに貸し出し冊数と期間は、冊数は、制限なし、期間は、基本的には28日間となっていました。又図書館間貸し出しは、借り出し件数は、少し減少傾向にあり、年3000件、貸し出しの件数も、同じように減少傾向にあり、年15000件程度と言うことで、1000~2000件の減少だそうです。この傾向は、自館及び他の個々の図書館の蔵書の増加による影響が大きく、どこの大学図書館でもこの傾向が続くであろうと分析していました。

勿論、目録作業は、現在総てコンピューターで行なわれており、1963年以前のは、マイクロで、その後1980年までは、カード、それ以後は、コンピュータ処理されていて、OCLCのカタログをコピーして、整理する方法で、ノーヒットのものは、次のOCLCのサービスまで残し、ヒットするまでこの作業を繰り返し続けるやり方でした。1984年から、大きなプロジェクトとしてジーアクマシーンと言うものを開発中で、これは現在MITの中で同時に動いている二つのシステムをひとつにする計画とのこと、あまり詳しく説明をしてくれませんでした。それと、整理されたカタログをCD-ROM化して6ヶ月毎にそれを学内研究者に配布し、研究者はそれにより自分のデスクで図書の検索が可能になり、即座にその資料のあらゆるサービスを受けられるようにすることも1991年の内にできあがるとのことでした。MITでは、既に研究者には、学内研究室は勿論のこと、自宅にもコンピューターがありオンラインで接続されている状態なのでこのようなことも可能になるとのことでした。

さて、これだけのサービスをしている図書館のスタッフの数だが、現在ライブラリアンと呼ばれる専門の図書館員は、86名、それをサポートする専門助手が、141名、学生アシスタントが、31名、総勢258名のスタッフで運営されていました。非常に多くの方が働いているのだなと思いましたが、この数が決して多くはないと感じたのは、この後、図書館内を実際に見てからのことでした。

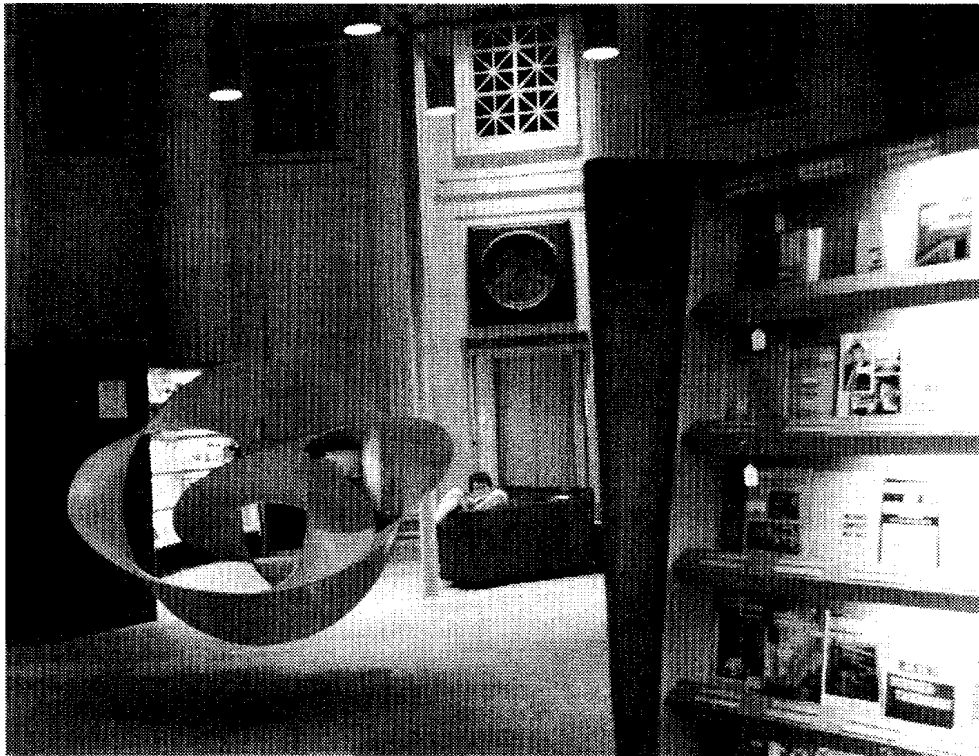
見て回った図書館は、大きく五つに分けられている内の人文科学系図書館 (Humanities Library) と工学系図書館 (Engineering Library) のマイクロサービス部門です。どちらも25万冊程度の蔵書の図書館です。まず人文科学系のほうは、と言うよりどちらの図書館も、夏休みの時期なのに多くの学生が利用していたのには、とても驚きました。それでも普段の5割程度で業務もスムーズに流れているとのことでした。建物は比較的新しく閲覧室は、外の光をうまく取り入れてあり、明るく、天井も高くて広い感じがしました。レフ



5. 閲覧室内 (MIT)

ァレンスブック、カタログ類と、カード、冊子目録、検索機器が同エリアに置かれてあり、多くの利用者が、熱心にそれぞれで検索していました。機械検索は、オンラインのもの、CD-ROMによるものに分けてあり常にシステムは起ち上げてありすぐに検索に入れる状態にしてありました。書棚は低いものが使われてあり、閲覧室の奥に行くと2層式になっていてその上の部分には閲覧机と書棚があり図書が配列されていました。地図専用の閲覧室もありました。ここでは、書庫の中は見せてもらえませんでした。ここを出

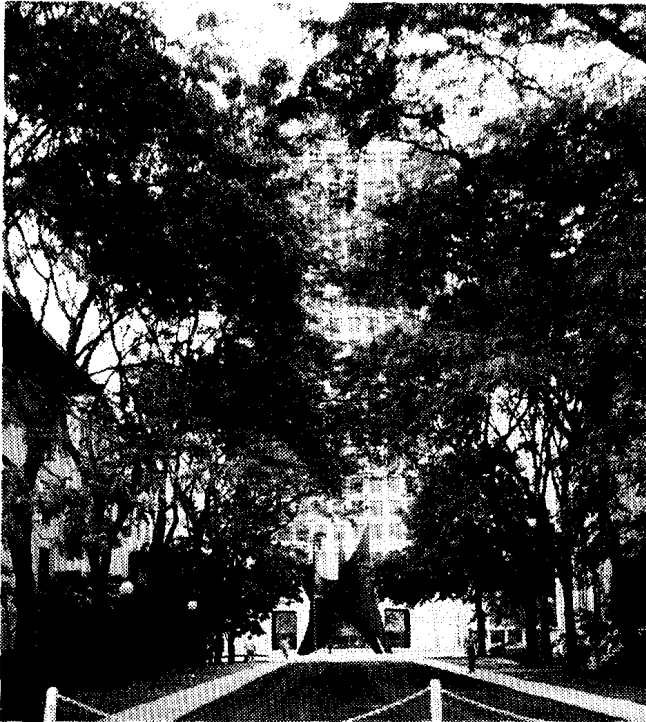
て、グレートドームを通り工学系の図書館に入ると、さすがに近代的な内装には驚きました。古めかしい感じを受ける外見とは反対に、近代的な内装は、この図書館のほぼ中央に当たると思われる雑誌閲覧室に来て興奮させられる



6. 雑誌閲覧室 (MIT)

思いでした。古典的な柱や内壁に対し近代的なデザインのオブジェを天井中央から吊し、その回りに雑誌架が配され、ソファが置かれ、利用者が閲覧している姿は、まさに大学として古い歴史を持ちながらも世界の最先端を行く名門 MIT だなと思いました。ここのマイクロサービス部門は、工学系なので最新の情報を得ようとする人達でかなり混雑していました。また事務所にも入りましたが、山と積まれた資料の中で20名ほどの人が忙しそうに仕事をしていました。

MIT 図書館では、他の大学図書館とオンラインネットワークを組み、サービスの向上を図ろうと言う計画があることも話してくれました。この大学図書館ならそれも可能であろうと思いながら MIT を後にしました。



7. MIT

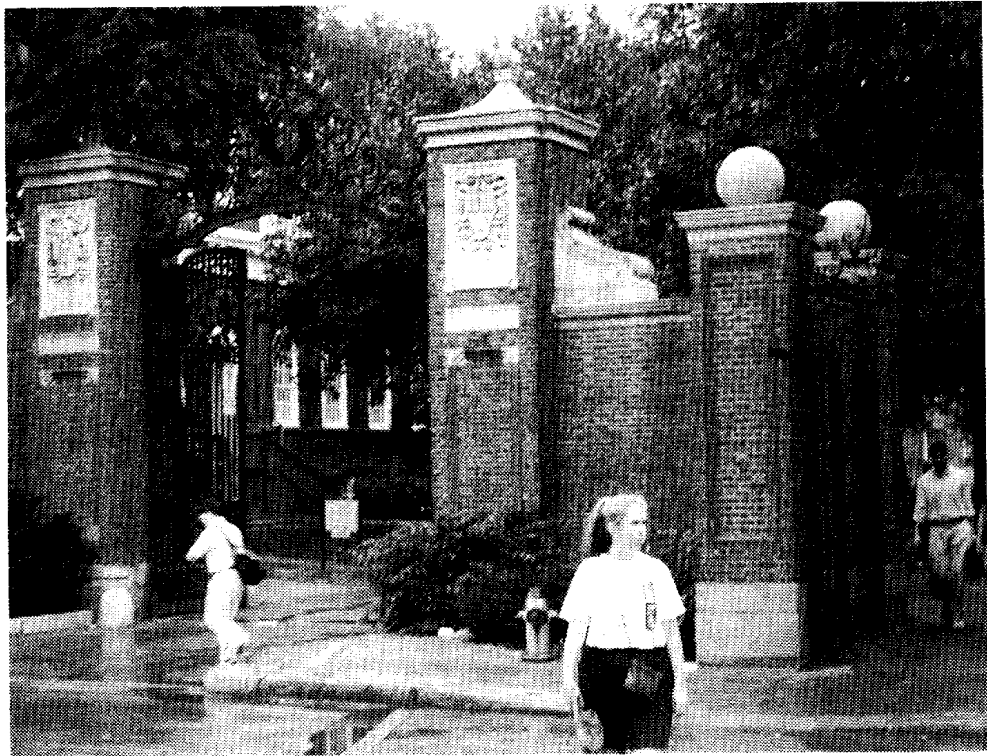
ハーバード大学図書館

(Harvard University Library)

7月24日、火曜日、曇りのち雨、午後2時、Widener Libraryに入る。

ラザボアー（グリーンライン）からパークストリートでレッドラインに乗り換えてハーバードスクエア下車、ここが、あのアメリカ最古の大学、ハーバード大学の駅です。ついにハーバード大学に来ました。興奮する気持ちを押さえながら地下鉄を降りて階段を上がって行くと、いかにも学生街と言った感じで本屋、スポーツ用品店、ファーストフードショップ、コープなどがあり、夏休みで、本来なら学生のいない時期だというのに学生らしき人や、そうでない人達などかなり大勢の人達でいっぱいでした。まさにここがあのハーバードスクエアかと思うとなにかとても興奮してしまいました。

地下鉄を上った所、つまりハーバードスクエアのほぼ中央にある地下鉄乗降口、そこに立って私は、ぐるっと一回りして、ハーバードスクエアの空気を自分の体に十分しみこませゆっくりとハーバード大学の正門に向け歩き出しました。



8. ハーバード大学の正門

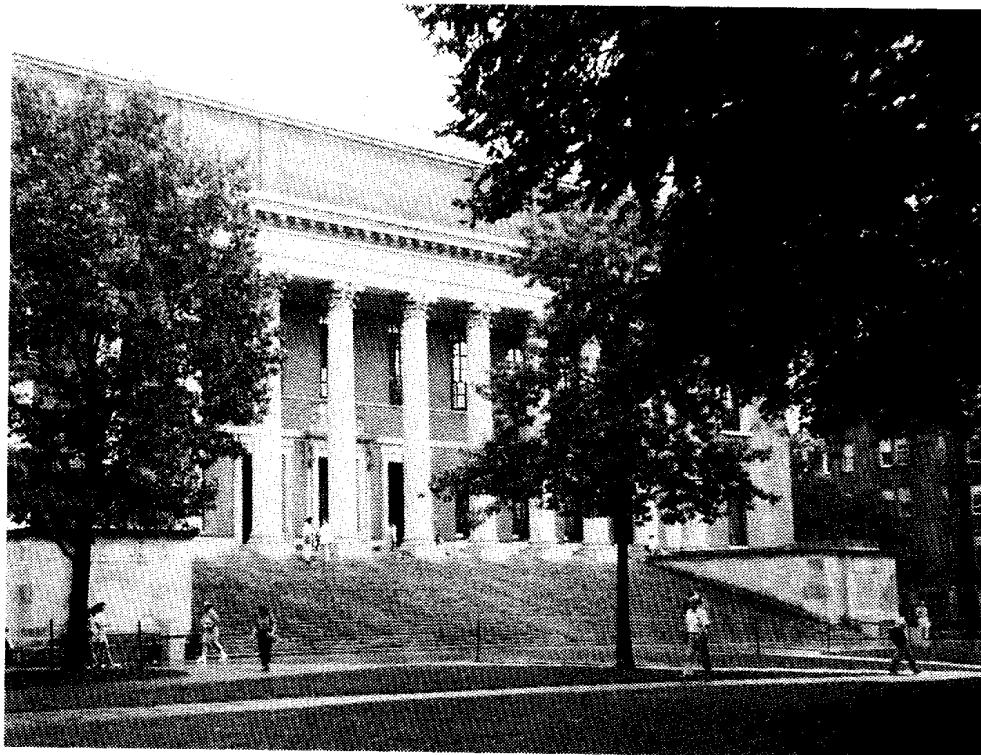
正門はアメリカを代表する名門ハーバードの名にふさわしく古く荘厳で門を通るものの気持ちが清められるような趣がありました。真っすぐ歩いて大学構内に入っていくと、左手には、ハーバード・ホール、右手には、ハーバード最古の建物、マサチューセッツ・ホールが、そして真正面には、ユニバーシティ・ホールがあり、その前には、ハーバード大学発足の源になる、遺産の一部と、300冊の蔵書を寄贈した牧師ジョン・ハーバードの座像がありました。ハーバード大学の名の由来は、この牧師の名からついたとされています。

大学構内はキャンパスと言うのが通常ですが、ここはハーバード・ヤードと呼ばれています。ハーバード・ヤードの中は、先程のハーバードスクエアの賑わいが嘘のように静まり返っていて、学問の地と言った感じを受けました。初めは、この土地に清教徒の精神を伝承できる優秀な牧師を育成するためのカレッジとしてスタートしたハーバードですが、現在のハーバード大学は、あらゆる分野の研究を推し進めている総合大学として、世界中から優秀な学生や教授陣が集まって来ています。ハーバード・ヤード内は、グリー

ンがとても美しく、リスがあちこちで見られ、大きな樹木と芝生があり、それらとハーバード大学の歴史ある建物とがみごとな調和を作り上げていました。

アポの時間まで少しあったので、ハーバード大学内にあるフォグ美術館を見に行きました。ここには、有名なゴッホの肖像画（帽子を被っていないもの）がありました。美術館を出て、ハーバードスクエアで昼食をとりましたが、こうしている自分がとても信じられませんでした。

アポの時間が近づいてきたので大学に戻りハーバード・ヤードにある古めかしき西洋建築物の中に入りました。これがハーバード大学のメインライブラリーのワイドナー図書館です。この図書館に隣接して三つの（プセイ、ホートン、ラumont）図書館があります。この三つのうち、プセイとラumont図書館へは地下のトンネルで行き来することが出来るようになっていました。ハーバード大学には、このほかに100近い図書館があり、広く大学の回りに分散していました。

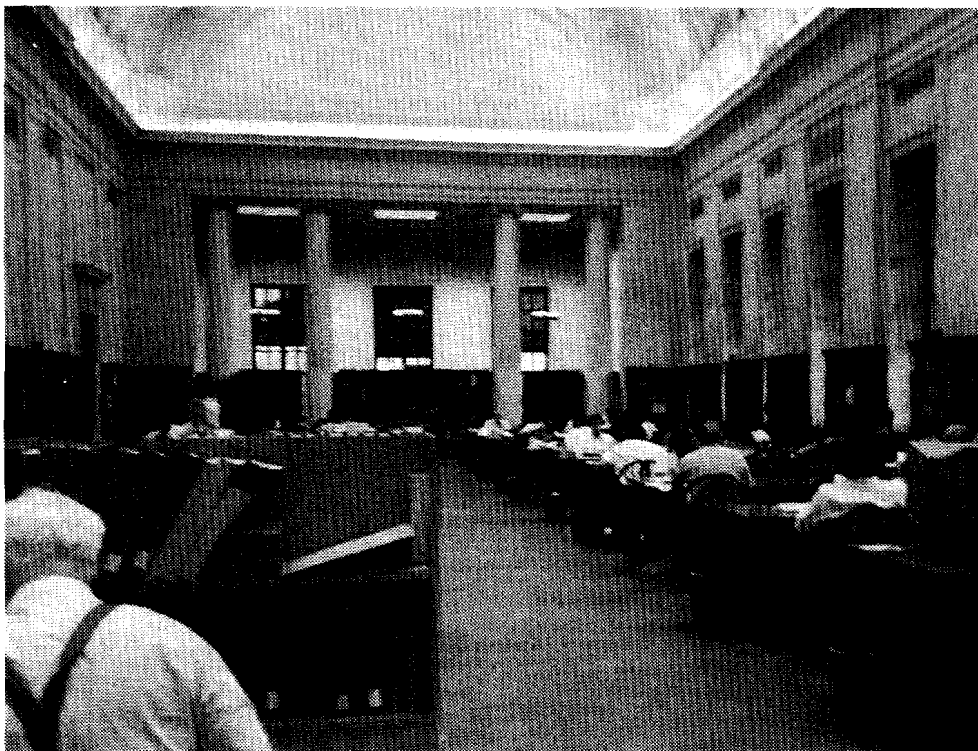


9. ハーバード・ヤードから見たワイドナー図書館（ハーバード）

さてワイドナー図書館に入り、まず驚いたのは、入り口の大理石の床や柱などで、その建築物がまさに18世紀のものであると言う事実と、それをそのまま現在も使っているにもかかわらず保存管理が行き届いていることでした。その証拠に中では、この建築物を保存管理するため大勢の人達が働いていました。

事務所も昔のままで、アメリカ映画の宮殿でのシーンに出てきそうな異様に高さのあるドアの向こうで、図書館員達が、コンピュータの端末機に向い、仕事をしている姿は、何とも不思議な光景でした。事務長補佐のナンシー女史に会い、丁重に挨拶をして、一人の女性レファレンサーを紹介していただき、その女性に、図書館の中を案内してもらいました。

ハーバード大学図書館は、合衆国の中で、最も古く、最も大きな大学図書館です。それは、図書館内を見れば納得できる事実でした。図書館内は、18世紀の趣をそのままに伝えていて、レファレンスブックのある閲覧室などは、私が今までに見たこともないような、とてつもなく高いドーム型の天井で、



10. 閲覧室（ワイドナー）

机の中央にはアンティークな電気スタンドがあり、まるで時代をさかのぼり、18世紀に戻ったかのような錯覚に陥りました。図書館内を案内しながら、いろいろ話を聞かせてくれましたが、建物はすべて昔のまま利用しているため割と狭い部屋が多く暗い感じがし、通路（通路ではなく目録室だったであろうが、今は通路になってしまっている）に置いてあるカードボックスなどは高すぎて上から3段目までの引き出しは、引き出してしまわないと利用出来ませんでした。ホール、あるいは閲覧室の入り口のところに置かれている機械検索用の端末機は、ハーバード大学のオンライン検索システム、HOLLIS (Harvard Online Library Information System) の検索端末と、その他CD-ROM用の機械でした。HOLLIS については、1978年以後のものを検索対象としているが、それ以前1918年から1978年のものはユニオンカタログで検索するようになっていました。現在約200万冊分のカタログデータがこの HOLLIS の中にインプットされているとのことでした。

書庫のなかも見せてもらいましたが、ワイドナー図書館だけで400万冊を



11. 書庫（ワイドナー）

越える蔵書をどのように収納しているのか非常に興味がありました。書庫は、地下2階地上9階のワイドナー図書館の閲覧エリアをぐるっと囲む感じで、低めのシェルビーに図書が整然と配列されていました。中は比較的明るくて、なかなか空調も行き届いているのか、快適でした。中では、図書館の職員とかアシスタントの学生達であろうと思いますが、返却されてきた図書や新刊本を配列していましたが、想像を絶する膨大な量でした。増加する図書の正確な数字は、つかむことができないほどで、それにもかかわらず廃棄は一切しない、当然デュプリケートはないとのことでしたが、保管をし続けることについては、今後の検討課題ではあるものの、現段階では、どのようにしても収納、保管していかなければならないのだと言っていました。

図書館の利用は、大学の学生だけでなく、一般の人達にも解放されていて、利用者すべてに対して一部、新聞とかマイクロ、地図等を省いて、貸し出し冊数、および期間の制限は特にないとのことでした。そのせいか、サマータイムにも拘わらず、利用者が、とても多く大学図書館のイメージではありませんでした。最後にこの案内の女性レファレンサーは、この大学は歴史も古く、この地域には昔から恩恵を受けているので、少しでもこの図書館が地域の人々の役に立ち、大学に属する図書館としての機能のみにならず、極端に言えば、公共図書館的な役割を果たし続けれるような意識を持って、ここのライブラリアンは働いている、そう言った意味からもレファレンスワークは、あらゆる質問に対して正確かつ迅速に回答をしなければならない、レファレンサーと言うのは、多分野に渡る知識を身につけなければならない、そのために常に勉強している、これに関しては、ハーバードのライブラリアンに限らずアメリカのライブラリアンは、みんなそうであろうと、言っていました。

見学を終え、ワイドナー図書館から出るとき、バッグの中をしっかりとチェックされましたが、持ち物の規制など考えも及ばないほどの大きな図書館では、こうでもしないととても資料管理などできないであろうと思いました。外に出たら、雨が降っていてハーバード・ヤードの緑が一層美しく見え何か言葉では言い表わせない満足感を感じながら、地下鉄の駅へ向いました。

帰りの地下鉄の中で、大学図書館員の意識の違いと、ライブラリアン（英語で図書館員のことをこう言うが、はたして日本の大学図書館員をこう呼べるだろうか）と呼ばれる人達のレベルの違いを痛感しながらも図書館で仕事をしている自分が、嬉しくなりました。

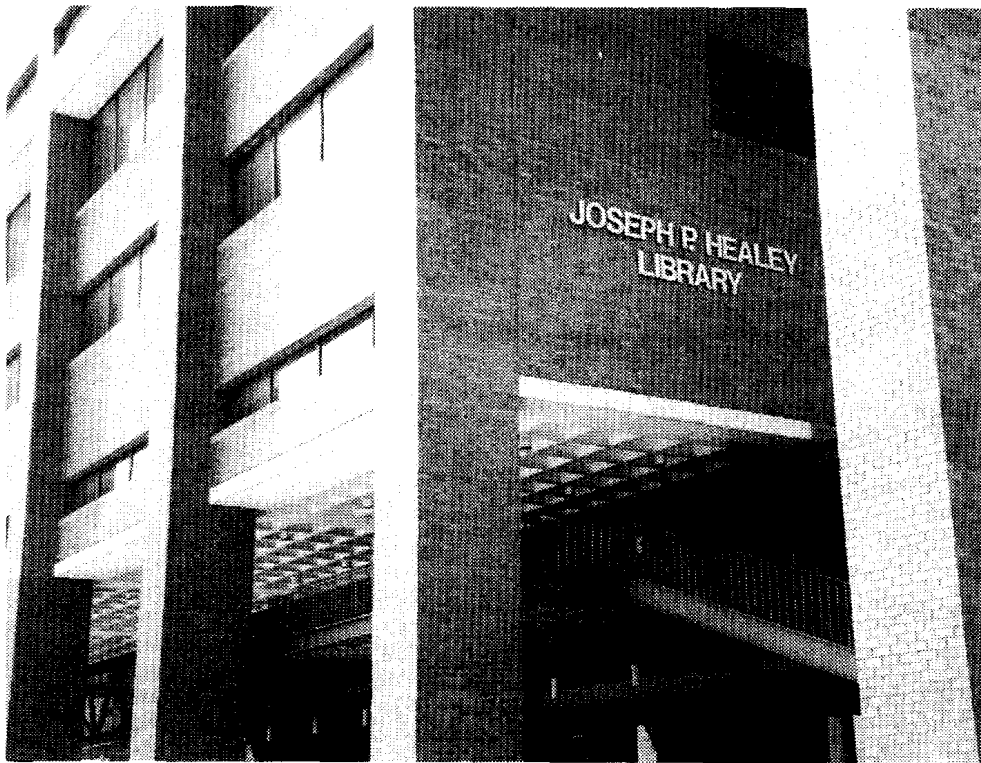
マサチューセッツ州立大学図書館

(Healey Library, University of Massachusetts—Boston)

8月7日、火曜日、晴れ、午前10時、Healey Library に着く。

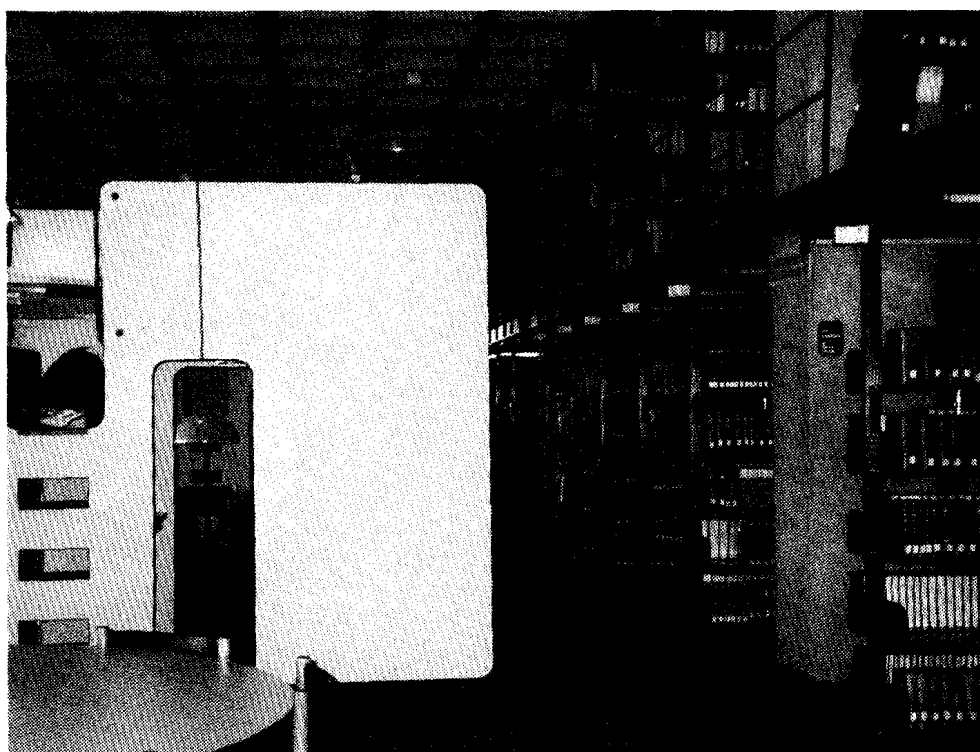
地下鉄でラザボアーからパークストリートで乗り換えてオレンジラインのユーマス・ジェイエフケイミュージアムで降り、スクールバスで5分ほど行くと、ボストン・ハーバーを眼下にマサチューセッツ州立大学はありました。その中央に建っている10階建のビルが、ヒーレイ図書館です。マサチューセッツ州立大学には、二つのキャンパスがあります。ひとつがこの、ヒーレイ図書館のあるハーバー・キャンパスで、もう一つは、ボストンの繁華街バック・ベイにある、スクェアー・キャンパスです。スクェアーキャンパスは町の中にありキャンパスとは言うものの、実際には、一つのビルだけで、教室があるだけでした。それとは、対照的にハーバー・キャンパスの方は、ボストン・ハーバーに面していて、建物も新しくキャンパスもかなりの広さがありました。

訪問した、ヒーレイ図書館は、ハーバー・キャンパスのほぼ中央に位置し、10階建で大学の中では、一番高い建物でした。1階はオープンスペースになっていて階段を上った2階が入り口になっていました。中に入ると、貸し出し返却のサーキュレーションのカウンターがあり、反対側には、インターライブラリーローン（図書館間貸し出し）のカウンターがありました。この玄関ホールから見えるはボストン・ハーバーはとても奇麗でした。3階に上がっていくと、リザーブブックルームと言うのがあり、ここは、大学の教授たちが読みたい本を予約保管しておくためと、頻繁に利用される図書を保管し希望者には閲覧（貸出期間が2時間となっていた）、またはコピーを撮



12. ヒーレイ図書館入口 (UMass)

るための貸し出しのみを行う部門がありました。4階に上がってみると、ここはレファレンスルームでした。フロア中央にあるレファレンスデスクには二人のレファレンサーがいて利用者の問い合わせに答えていました。その脇の机の上には、3台のOPACが置いてあり、それぞれ起ち上げられていて、いつでも利用できる状態になっていました。そしてその回りには、レファレンスブックが置いてあり、その回りに、つまりこれで建物の一番外側になるのですが、事務所がありました。5階は、逐次刊行物、政府刊行物、マイクロがあり、4階と5階の中央は大きく吹き抜けになっていて、4階のレファレンスルームを上から見る事が出来ました。その回りに、5階の閲覧室と事務室があり、それぞれのカテゴリーで、デスクと資料が配置されていました。6階から10階までは、閲覧室になっていて各階は、請求番号で分けられていました。蔵書数約50万冊はすべて開架式で閲覧できるようになっていて、その中でとても興味深かったのは、閲覧機がとてもユニークなもので、2階式で上下で一人づつが個別に閲覧できる閲覧ボックスみたいなものがある



13. ユニークな閲覧ボックス（ヒーレイ図書館）

りとてもおもしろいと思いました。

創立が1964年と新しく、まだ25年しか経っていませんが、立派な図書館でした。貸し出しについては、冊数の制限はなく、期間については原則として28日間となっていました。開館時間も、毎日開館で、金曜日以外の平日は、午前8時から午後10時まで、金曜日は、午前8時から午後6時まで、土曜日は午前9時から午後5時まで、そして日曜日の開館時間は、午後1時から8時まで、となっていました。

全館開架とか、リザーブブックルームとかユニークな閲覧ボックスとか、なかなか前向きな姿勢を感じた図書館でした。

ニューヨーク (New York)

7月30日から8月6日までの8日間、私は、ニューヨークに滞在しました。

ボストン10時30分発のパナム PA529 便でニューヨークに11時35分に到着しました。夢にまで見たニューヨークへの第一歩です。ニューヨークのラ



14. ニューヨーク

ガーディア空港から車で約30分、宿泊予定のホテルに着きました。そのホテルは、マンハッタンのミッドタウンのパーク街にあり、近くにはグランドセントラル駅、あの有名なパンナムビルがありました。少し歩けばエンパイアステイトビルもあり、とても良い場所でした。ラガーディアからマンハッタンまでの車の中から見た摩天楼の眺めは壮観で、まるで自分が映画の中にいるような気分になりました。

ニューヨークは、やはり、想像通りのビッグシティでした。マンハッタンの通りはどこも人で一杯で、通りを通る車もクラクションを鳴らしながら走っているし、夏にも拘らず、あのマンハッタン名物のマンホールから出る蒸気もあちらこちらで吹き出でいました。ビルは、どれもノッポビルで空を見上げれば、そこには四角い空がありました。マンハッタンの中を歩いていて一番感じたことは、この街は、生きていると言った感じで、常に何か、動いているような雰囲気がありました。

それでは、ニューヨーク滞在中に訪問した二つの大学図書館について報告

します。

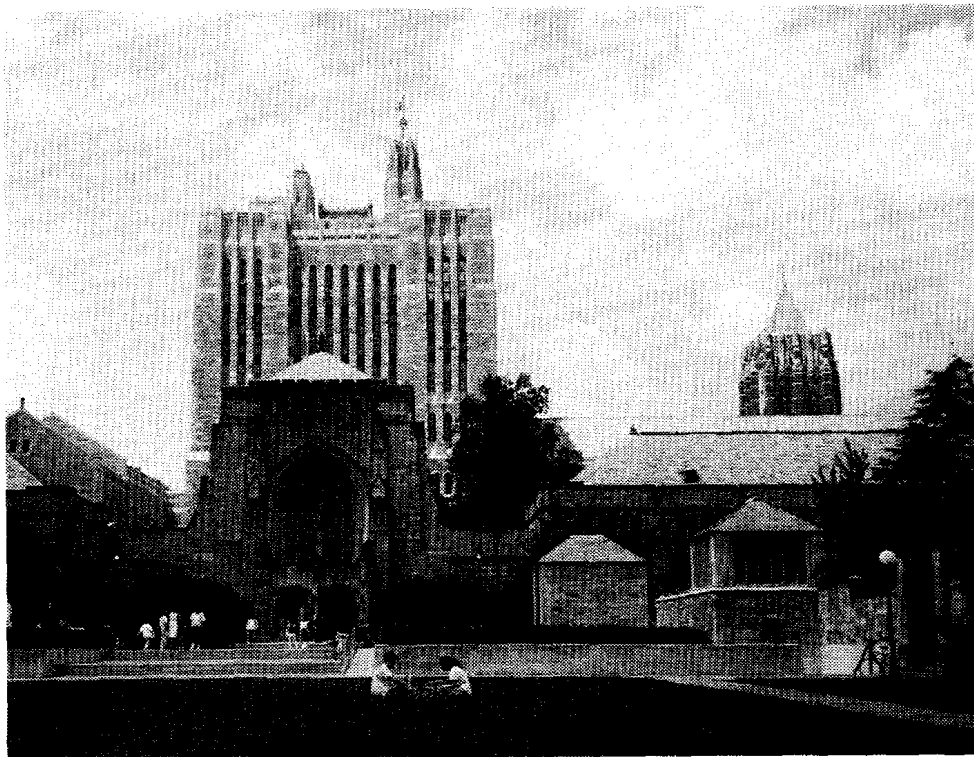
イエール大学図書館

(Yale University Library)

7月31日、火曜日、晴れのち雨、午前11時、Starling Memorial Libraryの前に立つ。

ニューヨーク、グランド・セントラル駅から電車に乗り、ニューヘブンを約2時間で到着しました。ニューヘブンの街は、イエール大学でほとんど埋め尽くされているようで、大学の建物があちこちに散らばって建っていました。

大学のインフォメーションオフィスを、通り抜けると、そこは、1701年創設当時のキャンパス、オールドキャンパスです。正面にハークネスタワーをみながらそのキャンパスのグリーンを踏み締めて奥のほうに歩いて行くと、18世紀頃のいくつもの建物が、目に入って来ます、これらは、カレッジと呼ば



15. スターリング記念図書館（イエール）

れ、昔の学生寮だそうです。これらに囲まれたクロスキャンパスの向かい側に、訪問しようとしている、イエール大学最大の図書館、スターリング記念図書館がありました。イエールの発展に貢献した、ジョン・W. スターリングにちなんで名付けられた、記念図書館で、イエール大学で、最も大きな図書館です。イエール大学図書館全体の蔵書数は、400万冊に及んでいますが、その殆んどがここに収容されています。

ゴシックスタイルの建物の中は、入り口から教会の本堂のような大きなホールが広がり、その両側に閲覧室がありました。入り口を入ってすぐ右側の部屋は、リノニア・アンド・ブラザーズルームと呼ばれ、18世紀に、図書館設立に当たり、読書の喜びを主眼として本を寄贈した二つの学生討論グループの名に因んで付けられたそうです。その反対左側の部屋は、定期刊行物の閲覧室で、ホール突き当たりがカウンターになっていました。その左側は、大閲覧室で、18世紀そのままの雰囲気は漂っていました。その大閲覧室入り口の左側は、新聞、マイクロフィルムの部屋になっていました。



16. 大閲覧室（スターリング記念図書館）

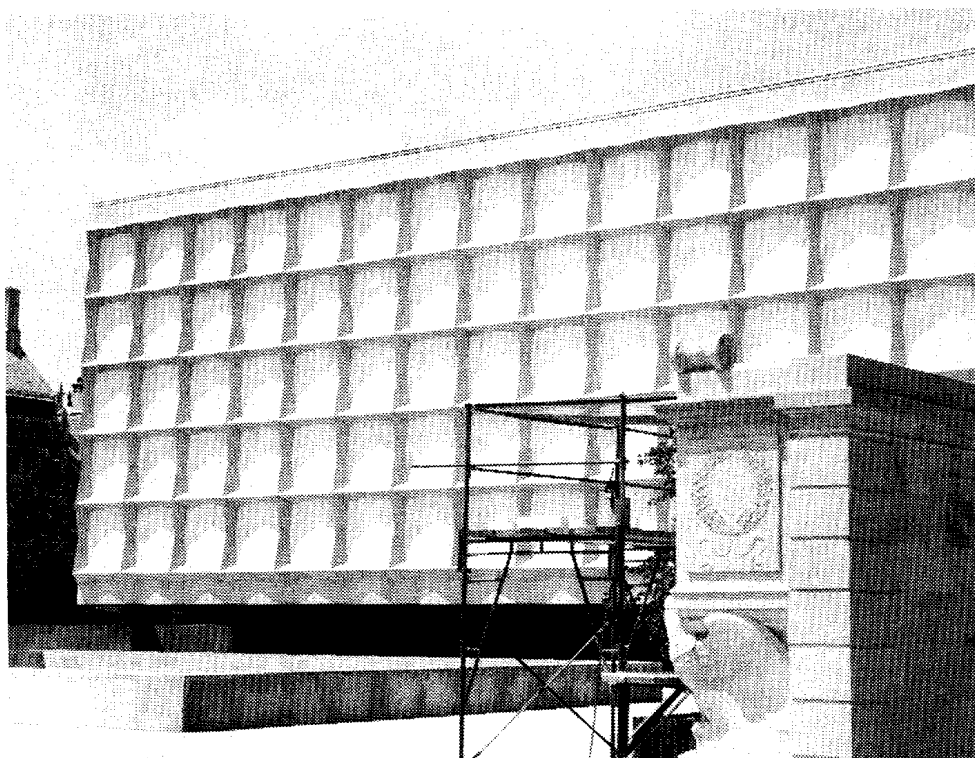
カウンター右側から書庫の中に入ることができ、利用者は、書庫への入庫証を見せれば誰でも利用できるようでした。私も、書庫の中を案内してもらいましたが、書庫の中は16階になっていて建築当初そのまま、とても低い書棚と中の暗さには驚きました。

スターリング記念図書館は、主に大学院のための図書館で、学部学生のための図書館は、クロスキャンパスの地下にありました。地下道を通ってクロスキャンパス図書館を見に行きましたが、地下にある図書館の割りに外からの光をうまく取り入れてありとても明るく感じました。この図書館の閲覧室でとても興味深かったのは、学生利用者がたくさんの本を借りて、家に持ち帰れないときに、その借り出した本をストックしておくボックスが、設置してあったことで、非常に利用者も多いと聞きなかなか良い考えだな、と思いました。

イエール大学には、このほかに、各カレッジ、大学院、専門大学院などに、合計40の図書館、図書室があり、その蔵書数も400万冊を越え、全米でも第4位、世界でも第6・7位に位置するということでした。カタログはオンラインカタログで、イエールの23の図書館で利用可能で、110以上の端末でネットされていました。オービス (Orbis) と呼ばれるこのシステムは、1977年以降の900万に及ぶ図書、雑誌、地図等のタイトルのデータが入力されていて、スターリング記念図書館の中での、利用端末機は、入り口ホールのカタログボックスの左手奥に、それから大閲覧室の中に、定期刊行物閲覧室の中に、3台ずつ設置されていました。

開館日時は、平常時と夏時とでは少し違いますが、平常時は、月曜日から木曜日までは、午前8時30分から真夜中の12時まで、金曜日と土曜日が、午前8時30分から午後5時まで、そして、日曜日は、午後1時から真夜中の12時まででした。夏時間になると、日曜日は休館で、月曜日から金曜日までが、午前8時30分から午後5時まで、土曜日が、午前10時から午後5時まで、となっていました。

貸し出しについては、冊数の制限はなく、期間は2ヶ月間で、雑誌などは、



17. バイネッキー珍本書館（イェール）

すぐに返却できる状態であれば、貸し出しするということでした。

とにかく、このスターリング記念図書館を、訪れて感じたことは、18世紀に建築された図書館の、大閲覧室など、現在そのままだでも立派にその機能を果たしている面と、オンライン検索などによる機械化された部分との妙なミスマッチが、最近の新しい図書館よりも、むしろ新鮮な感じを与えてくれました。

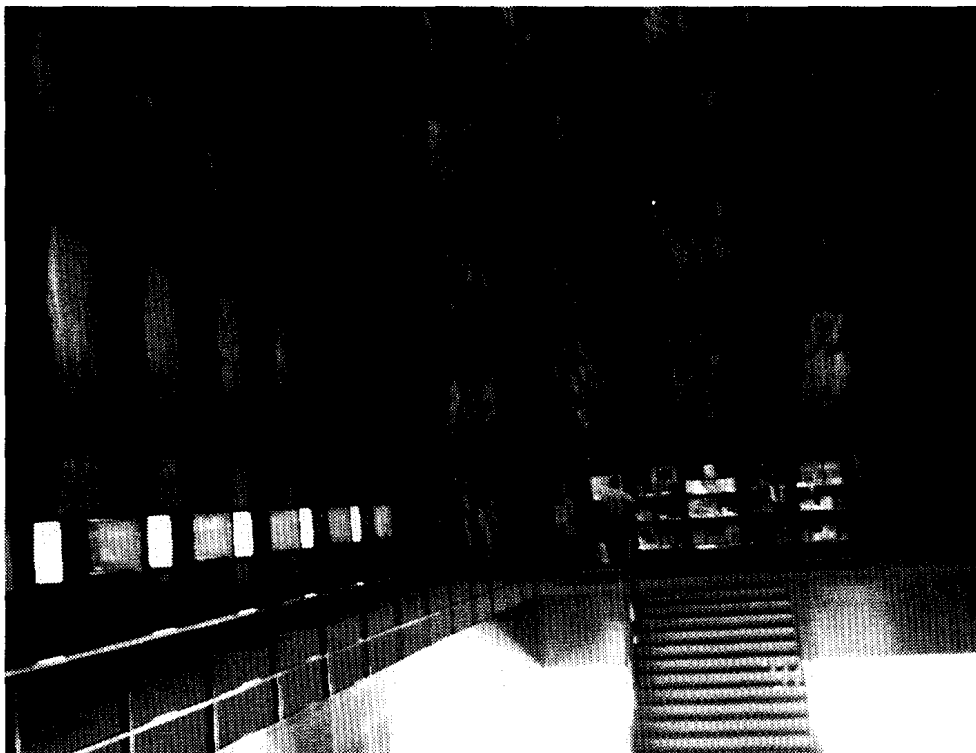
スターリング記念図書館を出て、北側にある法学部大学院に行きましたが、ここでもやはり建物に目がいてしまいました。階段踊り場の窓には歴代の法学部教授たちの似顔絵の小さなステンドグラスがいっぱい張ってありとても綺麗で、又、かわいくもありました。この建物の中には、図書室の他に、研究室や教室もあり壮厳な雰囲気でした。

次に、この法学部大学院の建物を出て、東側に、バイネッキー珍本図書館がありました。近代的な建物のこの図書館は、1963年に建てられたもので、その前には日本人（イサムノグチと言っていました）の作ったという彫刻

庭園があり、宇宙を表現したものだと言っていました。建物は一見すると何の変哲もない白い四角い建物ですが、実は、この建物の表面は花崗岩の枠に、およそ3センチの厚さの透明な大理石が嵌め込んであるものでした。回転ドアを通過して中に入ると、この透明な大理石を透けて入って来る太陽の光が、図書館の中に不思議な空間を作り出していました。

図書館は、地上2階地下1階の建物で、中央に書棚があり透明なガラスで囲まれ数多くの貴重な本、珍しい本が保管されていました。収納可能冊数は、約80万冊までできるように設計され、保管する本は、総てが貴重本なので、建物の大部分の空調が、常に地下3階の深さの温度と湿度に保たれているとのことでした。

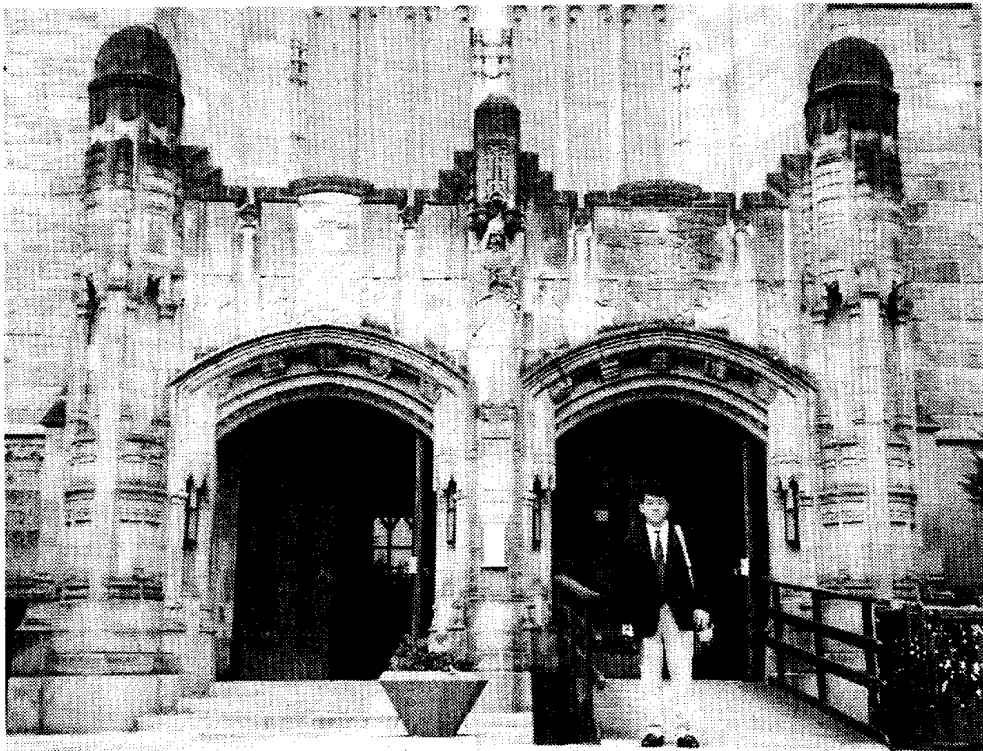
閲覧室は、地下にあり、1階はカウンターと事務室。2階は、展示フロアになっていて、そこにはゲーテンベルグの印刷による聖書が展示してありました。1455年の印刷で、紙に印刷された完全な形のもので、ゲーテンベルクにより印刷されたものは、推測でおよそ200あり、170が紙に、残り30は、



18. バイネッキー珍本館の内部（イエール）

ベラムと言って、これは、上質皮紙で子羊や子やぎ、子牛の革で作り本の表紙などに使われているが、昔は、これを書きものに使ったものに、印刷されたようである。現在では、そのうち21冊が完全なものとして残っていて、内16冊は、合衆国以外の国の図書館や個人のコレクションになっていて、残り5冊が、アメリカ国内にあります。それに加えて26冊の不完全なもの、多数の断片が、今でも多く残存されています。ここに展示されている1冊は、アメリカ国内に5冊しかないうちの1冊で、非常に貴重なものとされています。

ゲーテンベルグバイブルを見て、外に出て、もう一度スターリング記念図書館の前のクロスキャンパスに戻り、重厚なゴシック式建築物の図書館を目に焼き付けて、イエール大学を後にしました。



19. スターリング記念図書館の前で筆者（イエール）

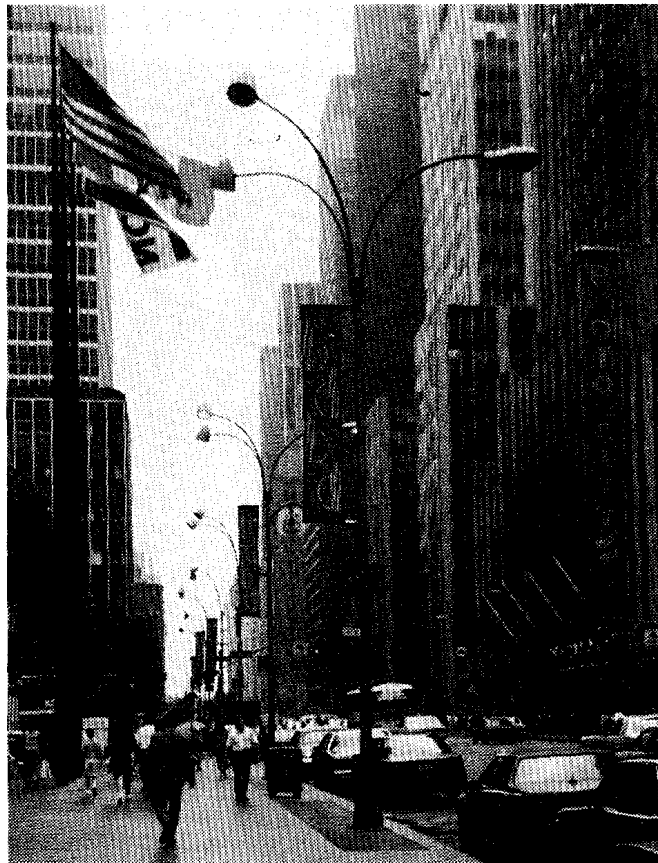
コロンビア大学図書館

(Columbia University Libraries)

8月1日、水曜日、晴れ、午後1時、コロンビア大学図書館に着く。地下鉄に乗りコロンビア大学まで行きましたが、ここで少しニューヨークの地下鉄の話ですが、利用するには少々複雑で、慣れてしまえばかなり便利であろうと思いましたが、急行と各駅停車の別、ホームを何本もの路線が共有しているなど、ちょっと戸惑います。今はもう以前のような落書きのある車両はなく、ほとんど綺麗な車両（日本製だそうです）で、昼間に利用する分には、さして危険もないと思えました。ただいくら昼間でも、私の行った116番通り駅をダウントウンの方から来て越えるとハーレムに入るので危険だと聞きました。実際、私は、ミッドタウンの34番通り駅から乗り116番通りで降りましたが、ここで降りなければかなり雰囲気は悪い感じがしました。ニューヨークの地下鉄の駅名はほとんどがこのように通りの番号あるいはその名前で付けられていて実際その通り

の真下に駅がありその点では、利用し易かったと思います。これは、地下鉄に限らずタクシーに乗ってもおなじで、ニューヨークの街が碁盤の目のようになっていて、南北に流れる通りをアベニュー、東西に流れる通りをストリートと言い、これはとても便利でした。

さてニューヨークの街の話はこの位にして、コロンビア大学の話に戻りますが、アムステルダムアベニューに面した門から構内に入ると、広いキャンパス



20. マンハッタンのラジオシティ前（ニューヨーク）

に出ます。左手に THE LIBRARY OF COLUMBIA UNIVERSITY と壁に掘られている建物があり、18世紀に建てられたギリシア宮殿風の建物で、当初は図書館だったらしいですが、現在は、ロープラザという構堂として利用されていて、図書館はその反対側正面にありました。

コロンビア大学の図書館は、バトラー図書館と呼び、コロンビア大学の中の23ある図書館の中核になっています。バトラー図書館の中は、18世紀の雰囲気そのままだと伝えていて、閲覧室や閲覧机、柱の一本一本にまで歴史を感じてしまいました。閲覧室の天井は高く、閲覧機の中央にはシンプルな蛍光灯が配されていて、静粛な趣を漂せていました。6階建のこの図書館は、中央に書庫をもち各階とも回りに事務室や閲覧室がありました。3階に大閲覧室、サーキュレーションデスク、レファレンスルーム、カードカタログ、逐次刊行物室などがあり、図書館の中心になっていました。4・5・6階は閲覧室があり、6階には貴重本や、重要な原稿などを保管している図書室がありました。

書庫は、6階建の図書館の中央にあり10層ぐらい（はっきりわからない）



21. コロンビア大学入口（ニューヨーク）

になっていました。中は狭くて暗く、天井も低く、書棚も5・6段しかありませんでした。コロンビア大学図書館の総蔵書数は、約600万冊で、バトラー図書館の書庫にはこのうちの約200万冊が収められているとの事でした。確かに書庫の中は、既に一杯で、スペースが余り残っていませんでした。このことについて尋ねたところ、ハーレム地区に大きな倉庫を借り、そこに収容出来なくなった図書を収めるのだと言っていました。

カタログは、CLIO (Columbia Lib-



22. ローブラザ (コロンビア大学)



23. バトラー図書館 (コロンビア大学)

raries Information Online) と呼ばれるオンラインカタログと、カードカタログがあり、クリオ用のターミナルは、バトラー図書館には、6台置いてありました。クリオには、1981年からの整理された図書が入っているとのことで、それ以前のは、カードカタログで検索しなければなりません。クリオ用のターミナルは、コロンビア大学の総ての図書館の中にありどこでも検索出来るようになっていました。

開館日時は、それぞれの図書館でかなり異なっていましたので、はっきりとは言えませんが大体午前9時から午後10時頃までは、通常開館しているようで、夏時間も、日曜日が休館になる以外、余り変わらないとのことでした。

貸し出しに関しては、冊数の制限はなく、期間は1ヶ月と言うことでした。

次に、見学した図書館は、コロンビア大学のドナルド・キーン教授が日本文学の研究者として有名なことをご存じと思いますが、そういったCJK系 (Chinese, Japanese, Korean) の図書を所蔵している、合衆国でも、1・2位を争うほどの図書館、C. V. スター東亜図書館でした。

C. V. スター東亜図書館には、約50万冊のCJK系図書があり、日本語図書



が、約21万冊、中国語図書が、約20万冊、そして朝鮮語図書が約9万冊あるとのことでした。日本語図書を少し見せて戴きましたが、ここに居れば、日本の私の大学規模の図書館と余り変わり無く日本の図書が利用出来ると思うぐらい充実していました。実際これは驚きでした。

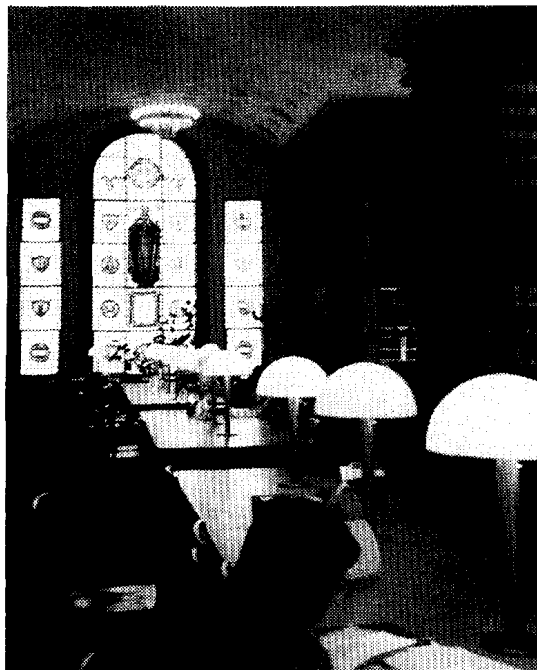
日本の図書が、コロンビア大学に、こんなにもたくさん所蔵されていることを知り、ひょっとしたら私の大学の図書館の和

24. バトラー図書館閲覧室



25. 書庫（バトラー図書館）

図書よりも多いのではないか、充実した資料があるのではないか、と思いつつ、少し悲感しながらも何か、日本の図書館を見た様な感じがして、ほっとしてコロンビア大学をあとにしました。



26. C. V. スター東亜図書館閲覧室（コロンビア大学）

おわりに

以上で、私が訪問して印象に残った大学図書館の報告を終わります。このほかにも、公共図書館のボストン図書館、ニューヨーク図書館、シカゴ図書館などを見て来ました。ただワシントン D. C. で楽しみにしていた国会図書館が工事のため閉館していたのが非常にショックでした。今回は、大学図書館の報告で終わってしまいましたが、これは、公共図書館とのアポを取ることが非常に難しいと言うことで、十分な案内を受けることが出来なかったことによります。

さて今回の訪問で感じたことは、歴史の古さや、蔵書の多さ、機械化の進歩もさることながら、そこに働く図書館員の姿が、妙に心に残りました。これは、私達の態度と比べ感じたことではなく偏見ではないと思いますが、そこに働いていた図書館員達の姿は、妙に陽気で自信に満ちていたように思えてなりません。これは、民族性にもよるのであろうが、仕事に追われ余裕のない働き方をしている私達に比べ、彼らには、忙しい中にも自信に満ちた余裕が感じられたのは、やはり歴史と言うものが大きく影響しているのではあると思います。長い歴史の間に確立されて来た図書館の組織の元で図書館員達は、それぞれのセクションで誇りを持って働いている、その姿とあの自信を今でも、そして今後も忘れる事なく、これからの私の心の糧として持ち続けたいと思っています。

最後に、優しく、丁寧に、図書館を案内してくれたアメリカの図書館の人達に感謝の意を表し、報告を終わります。